



# トマト類の春先(2~4月)の栽培管理について

廣瀬 美奈子

冬から春へ季節が移り変わるにしたがって日射量・気温が上昇します。日射量は12月中旬を境に、気温は1月下旬を境に上昇に向かいますが、とりわけ2月からは日射量・気温が上昇し(図)、トマト類の花房が充実し、安定した着果と肥大が期待できます。その一方で、栽培管理の遅れやしおれ等の発生により草勢が低下する事例がみられます。変化していく日射量・気温に応じてかん水管理や温度管理、葉面積を調整しながら栽培管理を適切に実施し、草勢の維持を図りましょう。

## 1.日射量の増加に応じた栽培管理

日射量が増加すると光合成能力が高まり、植物の生長が促されます。2~4月は日射量の増加に対してかん水量や肥料の調整が追いつかず、葉が小さくなる、茎が細くなる等草勢が弱くなる場合があります。かん水間隔を短くし、施肥量やかん水量を増やしましょう。また、2月は日射量が増加しても、外気温はまだ低い時期であるため、暖房機等による加温や日中の適正な温度確保に努め、養分の吸収を促しましょう。

## 2.葉数(葉面積)の確保

日射量の少ない1月中旬までは摘葉によって葉数を減らすことで呼吸による消耗を減らし、果実への糖の分配を促しますが、1月下旬ごろからは少しずつ摘葉を控え、春以降に葉数を確保できるようにします。葉を残すことで、増加する日射量に合わせて十分に光合成ができるようになります。日射量の増加に合わせて徐々に葉数を増やして、葉面積を確保していきましょう。

日射が強くなる4月以降には、黄変果等の生理障害果の発生が多くなりますが、葉を残して果房を覆うことで果房に当たる直射光を和らげ、生理障害果の発生を減らす効果があります。確保する葉数は、葉の大きさによって調整し、混みすぎないようにしましょう。

## 3.しおれ対策

日射量の増加に伴い、午前中に温度が急激に上昇すると、換気により湿度が急激に低下し、この湿度変化によりしおれが発生しやすくなります。しおれが発生すると、草勢は弱くなり、草勢の回復が難しくなります。そのため、施設内の温度が上がりに始める日の出頃から、天窗開度を調節しながら換気を始め、ゆっくりと目標の温度まで上げることで、湿度の急激な変化によるしおれを防ぎましょう。また、この管理は茎葉や果実への結露を軽減し、この時期に発生しやすい「灰色かび病」を抑制する効果が期待できます。

天候の急変時には、遮光カーテン

の利用も効果的です。施設内の温度の上昇や天候の急変によるしおれが心配される場合は、日射量の確保よりも優先的にカーテンを展張しましょう。

## 4.高温対策

4月下旬ごろからは、ハウス内温度が30℃を超える日が増加します。トマトが高温に晒されると、黄変果や裂果などの生理障害果の発生が増えます。また、呼吸による消耗が激しくなり、果実の肥大は悪く、草勢が低下します。例えば、光を多く透過しながら高い遮熱効果を発揮するハウス塗布剤(遮熱塗料)を使用することでハウス内温度を低くできます。春季の収量を確保するためには、夏季だけでなく、春季にも高温対策に取り組むことが大切です。

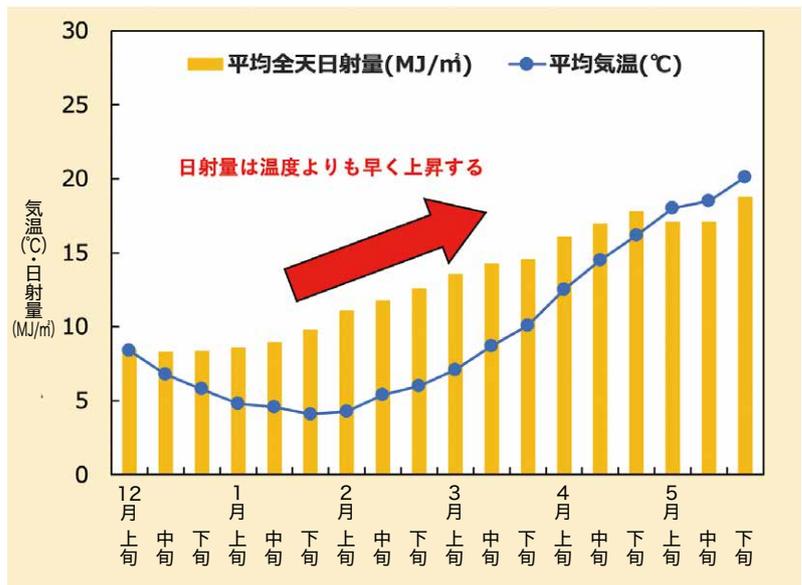


図 日射量と気温の推移(アメダス名古屋平年値:12~5月)